

集

俳句フォーラム

2019年4月 第71号

白山句会

義士祭

平野無石

香絶えぬ義士の墓前や大マスク
水囲む妹山背山木の実降る
枯池や維新史秘める寛永寺
不忍池もお留守か神の旅
討入の日や面影の陣太鼓

冬紅葉

都築繁子

初紅葉池の端におく救命具
聖樹の灯ホテルの椅子の昂揚感
暮近し店先におく陣太鼓
寒き黙若者もいる義士の墓
討ち入りのドラマは褪せず冬紅葉

短日

植木やす子

秋日和老木の杭取り替える
薄曇り足場浮かべて松手入れ
潜りては首だけ見せるかいつぶり
冬紅葉散り込む血洗いの井戸
短日や気ばかりせいて足鈍る

高輪泉岳寺

田中藤穂

義士の墓刃じんと刻まれ風冷ゆる
義士の日の僧列の着く泉岳寺
赤穂義士主従の墓所の返り花
人探す義士の日の寺混み合えり
義士の日の出店賑やか泉岳寺

ゆびきり

工藤はる子

ゆびきりの指の温もり春の雪
みつまたや寺町に陽のやはらかく
人形の肩にほこりや春の宵
花なづな円空仏のみなやさし
行く春の腕になじみし抱き枕

義士の日

篠田純子

義士の日やよくぞと線香たてまつる
安兵衛の墓に一升義士まつり
義士の日の主税の墓を撫でにけり
采配蘭さばきて秋の雨しづく
剥製の鶴の目に在る秋の色

一会

大山夏子

さざ波の一方向に秋の声
団栗の蹴られころげ来靴の先
帰り花崖の見守る義士の墓
身に入むや天狗になった僧の下駄
落葉踏む上り下りの一会かな





馬頭琴

渡辺節子

遙かなる凍土へ流る馬頭琴
二胡奏す遊牧の民星月夜
刈棚田の裾を洗うや日本海
菊尽し花嫁のれん母の愛
フルートの音が身に沁む山また山

同齡

大山夏子

茗荷の花亡母この庭愛せしか
烏瓜の自適の赤は惑いなく
冬瓜や所を得たり奥座敷
帰り花人無きベンチの傍らに
冬の月影も同齡背を丸め

入内雀

中川のぼる

入内雀人の栄枯は蕭蕭と
冬銀河二万六千光年の空
木の葉髪是非なきことの沙汰として
枯蓮と水に沈みし蟠り
十二月に染むや孤影のジョン・レノン

着物

江口九星

人生の影と耀き冬銀河
着物着ていやがって似合う七五三
木守柿光を受けて鳥一羽
新酒だと聞いてこくなる酒の味
昨夜嵐金木犀の香の栄える

ひかり

伊藤昌枝

彼岸花栄華きわめる唯一本
流れ星の燃えのこり降る地球
冬天に光をこぼすアリッサム
幼稚園児の個性小春の鼓笛隊
情け知る男黙ってマスクする

十三夜

楠本和弘

曼殊沙華瀬音掬いて戯れる
十三夜臍腑にしみる茶碗酒
冬茜の底へオカリナ流れ込む
ひと時の落ち葉織りなすアラベスク
冬の月時零しいる露天風呂

電飾光

小沢えみ子

焼き芋を半分のこし塾帰り
とりどりの洗濯ばさみ冬日和
2Bの影を濃くする冬夕焼
冬木立電飾光のよそよそし
本籍地人手に渡る年の暮

星月夜

吉宇田麻衣

星月夜いつまで構えいられるか
寺の庭銀杏どうぞかかれおり
背比べ抜かされそうな年の暮れ
冬の波見て猛省を紛らわす
気がかりな病も抜けし十二月

帯

酒井たかお

蚕豆植ゆ鴉のまなこ背に受けて
帯ほどくごとき光や秋没日
特攻兵語る女将や夕時雨
土もたぐ小さきいのちに霜囿
払いても心の煤は払い得ず

逆縁

渡部恭子

鰯雲どこまでいってもけんけんば
赤子沐浴もによもによ小春の日の中
干し大根あち向きこち向き日の光
着膨れて見得切っている影法師
逆縁の義母が触れいく実南天

円の会

過去未来

山田邦彦

笹舟の流れる秋の早さかな
柿紅葉地図から消える小学校
行秋やカーブミラーに過去未来
星の夜へ身体沈む藁布団
父よりも母よりも余生冬日和

遥拝

若泉真樹

渡り来し鴨の細身や心字池
色変えぬ松や往時の野面積み
くくのちの神に感謝し木の実拾う
奥の院遥拝冬の蝶も来て
平成の夢は一睡公孫樹散る

秋深し

石川東児

自然薯や苞にくるまれ庫裡の隅
移ろいし暮色を惜しむ伊豆の秋
道問へば駿河の訛り秋深し
秋の海行けど人無き小松原
着ぶくれの老僧誦経除に

帰り花

大山夏子

あと戻りして金木犀の香の中に
酔芙蓉吾もこの世の酔い深め
秋晴れの富士に横雲七曲り
眠り猫仰ぐ小春日燦燦と
帰り花塀の続きし大使館

分別

日置涛魚

退屈を描けば空や乱れ萩
小鳥来る変化を模索ささやかに
月の宴月を残して窓閉める
落葉搔くはらからいよよ遠くなり
分別や落葉溜りに杖預け

秋の暮

仁上博恵

秋の暮影長く伸ぶ路地の裏
秋愁いスマホを開く会いたくて
日照権今は昔に菊日和
街路樹の塩害茶色秋暮るる
無知という無尽の深さ木の実降る

障子

重原爽美

降る雨の音を見つめつ障子閉む
米山に開けたる障子空蒼し
山茶花に快晴の空拡げけり
山葵花や今朝一片の雲を見ず
寒もどり闇を育てる息づかい

小六月

小笠原妙子

秋の薔薇音なき音を重ね散る
良寛の文字のびやかに小六月
生かされて花野や未知の道を行く
小唄振りの舞で締めたる十三夜
不揃ひの二流も愛しりんご食む

寒茜

三羽永治

鴉鳴くビルの谷間の木守柿
黒艶の湯殿の木目窓の月
野菊濃し夫婦地蔵は手を握り
尾で応ふ犬との対話小春の日
生きてこそ浄土ありけり寒茜

七十路の旅

治部少輔

夜長かな合わぬ眼鏡で読書する
七十路を過ぎて朝の金木屋
木通の実低き垣根の幼稚園
道後かな漱石も佇つ秋夕焼
島々に秋の没日や旅終わる

歩幅

中山未奈藻

意見聞くための歩幅や小六月
深秋や貨物列車の長き音
紅葉黄葉マニキュア少し濃く塗って
ローマの冬古代の神ら散り逝きて
十六夜に祈る夭折の子の未来